

**概念名15**：ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している

**定義**：性行動の相手だけを求めてゲイ/MSMの場に接触しているために、予防情報に触れない、触れても拒否的、という阻害が起こる。

そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローズドで友達は持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気持ちいいセックスができればいいんですよ。……楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては。ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

**概念名16**：楽しいセックスができればいい

**定義**：楽しいセックスができるのであれば、知識として理解している健康上社会生活上の不利益を顧みなくてもよい。

そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローズドで友達は持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気持ちいいセックスができればいいんですよ。……楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては。ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

(理論メモ) 概念、「ゲイの友人は要らないが」と同じ根拠発言引用もとである。この発言で説明されている人物像は異性愛者として一般社会に許容されている生活を維持しており、HIVに感染することでその生活が脅かされるリスクがあることは読み手には明確であり、実際に感染した人は治療上の困難を抱えているとの言及もある。それでもなお、「楽しいセックス」がそのリスクへの用心よりも優先されるといえる。この発言は解釈できると思われる。

## § 上位カテゴリー

筆者らは続いて、上にあげたりサーチクエスチョン「予防行動の阻害要因」の概念を上位カテゴリーにまとめる分析を行った。その結果、捉えられた上位カテゴリーは、「生活に埋め込まれていない「知識」、「予防情報を単純に考

えたい」、「セックスがなによりも大事」、「コミュニティの中でのHIVへのタブー」、「気持ちのいいセックスを優先する」、「ネットによる作るのも簡単」、「捨てるのも簡単な関係性」、「社会生活と切り離れたセックス」である。

## 生活に埋め込まれていない「知識」

概念：ゲイ向け情報のマンネリ化

概念：知識からの「抜け道」を自己判断する

概念：あやふやな情報が先走りしている

これら3概念はどれもゲイ/MSMがもつ予防情報の陳腐化による新情報の受け入れ回避、不確かさ、誤解・曲解がある、という現象を捉えた概念である。

## 予防情報を単純に考えたい

概念：今のセックス行為を完全に变えることを迫る情報への拒否感

概念：初めて予防情報に接触する場合、そのまま受容・行動化する

概念：予防知識とQOLをはかってリスクを引き受けることの難しさ

性生活の経験が増すにしたがい、予防行動とは性生活の行動変容を要求するものであり、単純に絶対安全・絶対危険と言うことのできないグラデーションのリスクの中で自己の行動を自己の責任で決めるものである事実と直面する。そうした複雑で思い思考と自己決定を回避し、単純に考えたいという気持ちが、若さ、性生活と他生活との統合の度合い、現在の生活を犠牲にする度合いを要因に働く、と3つの概念からこの上位カテゴリーは解釈される。

## セックスがなによりも大事

概念：性についてのQOLを下げる予防情報は集団として受け入れられない

概念：性に関するタブーを作ることへのタブー

下位概念は一方は犠牲を強いる予防情報に拒否感がある、他方は性を全面的に肯定しようとするゲイの気風と予防情報との不整合を指しているが、どちらもセックスがとても重要な意味を持っているという集団的な空気を指している。

## コミュニティの中でのHIVへのタブー

概念：楽しむ場でHIVを語ることのタブー

概念：あやふやな情報のまま正しい情報を確認できない

下位概念はいずれもゲイ/MSMの集う空間で、HIVと予防情報について指しており、一方は楽しみに来ているのだからそういう場では語りにくい理由を、他方では「語らないことで予防情報が更新訂正されない」結果を説明している。

#### 気持ちのいいセックスを優先する

概念：セックスパートナーからの誘いを断れない

概念：ネットでのアンセフナーなセックスの書き込みに簡単にたどり着く

先述の上位カテゴリー「セックスが何よりも大事」と似ているが、先述のものが気風や集団心理のようなものを指しているのに対し、こちらのカテゴリーは個人、一人ないし少数の複数（セックスパートナー）との対人的な空間において、気持ちのいいセックスを優先して選択する、という上位カテゴリーである。

#### ネットによる作るのも簡単、捨てるのも簡単な関係性

概念：ネットによる作るのも簡単、捨てるのも簡単な関係性の作り方

セックスを含めたゲイ/MSM生活全般において、気軽に人と繋がりたい、そして煩わしい人間関係は回避したいというニーズに、ネットという媒体はもっともよく応えている。その結果として、個人プロフィールの省略、コミュニケーションの浅薄化、予防情報の欠落などが起こっている。

#### 社会生活と切り離れたセックス

概念：こっそりとセックスの相手を探す

概念：ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している

概念：楽しいセックスができればいい

とりわけ後半2つの概念は「ゲイ」というものを意識しながら反目する人について言及しているが、名前やプロフィールを隠して、異性愛社会の中で許容されている自己の社会生活を守りながらセックスの相手を探す一方で、その社会生活を守るために必要であるはずの「予防」は「楽しいセックスができれば」に優先されてしまう、という矛盾した行動様式にまとめることができる。

#### D. 考察

本研究では、調査手続きの項で述べたように、ゲイ/MSMの商業施設や当事者組織・当事者支援組織で活動してきた参加者から見たゲイ

/MSM人口の、予防知識の吸収や予防行動の実践を妨げる要素は何かを聴取、分析を行った。

本研究のリサーチクエスト(予防阻害要因)については、例えばメンタルヘルスの要因、異性愛社会の中でゲイ雑誌などへのアクセスがしにくいなどの幅広い要因が語られたが、今回の分析では特にゲイ/MSM個人が予防情報を受け取れない/受け取らない事情、および性行動の場面でセフナー行動を取らない事情といったより直接的な阻害要因に焦点を当てて概念の抽出を行った。

抽出の結果16個の概念が抽出され、筆者らはそれらから7つの上位カテゴリーを範疇化した。

ゲイ/MSMの中で予防を阻害する瞬間、あるいは予防を阻害されている個人の属性として今回の分析で上げられた概念・カテゴリー群の比較的多く共通したカテゴリーに、「その時その場のセックスをもっとも大切なものとする」とある。この考えは個人の行動規範の場合もあり(例:今のセックス行為を完全に変えることを迫る情報への拒否感)、ゲイ/MSMの集まる場所での空気でもあり(例:性についてのQOLを下げる予防情報は集団として受け入れられない)、さらにその時その場のセックスをもっとも大切と考える立場から、作るのも捨てるのも簡単な人間関係スタイルの需要をネットという新しいコミュニケーション媒体が満たしている。

同じセックスを重要視する文脈のある概念の中では、「性に関するタブーを作ることへのタブー」がやや他とは異色のものを含んでいるかもしれない。というのは、この「性に関するタブーを作ることへのタブー」は過去あるいは現在の異性愛中心社会の中で否定と抑圧の標的であった同性愛両性愛指向にまつわる性のありよう全体を肯定的に受容し積極的に実践しようとする、いわば文化的意味での「ゲイ」という気風とも解釈され、それ以外の「セックスを最優先」にみられる性生活とその他の社会生活との乖離とは逆の、統合的なニュアンスをも含んでいるからである。性に肯定的なゲイの文化的特徴が個人にどう理解され予防にどのように影響するのかにはかなりばらつきがあるかもしれない。

具体的には、ゲイバー、ゲイ向けのインターネットサイト、サークル、ゲイ向け予防啓発プログラムという「場」の中で、これまで比較的流通してきたゲイ/MSM向けの予防情報に触れてきたのだけれど、それらの情報に対峙す

る「場」の利用者の態度も一様ではないことが、本研究のリサーチクエスチョンから抽出された概念の多様性から示唆される。ある人は(かつては積極的に受け入れることができた)ゲイ向けの予防情報に飽和をおこしており(ゲイ向け予防情報のマンネリ化)、ある人は予防への知識や理解を深めてゆくほどに自己決定の難しさに直面させられる(予防知識とQOLをはかってリスクを引き受けることの難しさ)状況が予防障害となり、また一方で別の人は、ゲイという生き方に反感を持ったり(ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している)、またある人は「場」の外で営んでいる異性愛社会に順応した生活を守りたい動機付けから「楽しいセックスができれば良い」という行動をとったりしている。ゲイというものに親和性の高い人と低い人とでそれぞれ予防が阻害される理由が異なっていることが示唆された。

また興味深いのは、こうした「ゲイ」という生き方や社会生活に反目する人であっても、ゲイの「場」を利用するのであり、また「極端に避ける人はやっぱり関心があるからなんだと思うんですよ。ネット掲示板でリブたたきをする人っている訳でしょ？そういうひとはリブにどこか関心があるからわざわざ書き込みをする訳ですよ。(東京、ゲイバーのマスター)に言い表すことができるように、ゲイを避けるMSMもゲイという動きを意識して行動を決めていることが示唆される。ゲイ向けの予防情報、予防活動は公的なMSM人口群に届いてきていると思われる一方で、それらの情報はそれぞれの立場から様々な意味をもって理解されていると思われる。

今回の研究アプローチは少人数複数から得られたデータを質的に分析したものである。また、本研究のインタビュー参加者は、ゲイコミュニティを訪れる様々な人達を観察している立場、そして参加者自身のゲイコミュニティへの参与と経験が長い立場から発言しているので、リサーチクエスチョンへの答えの主語かときに自分であったり、またときにはユーザーであったり伝聞の情報であったりする。

本研究の手法と参加者の特性から、社会科学には標本抽出がもっともしにくい人口集団の、数量化の難しい情報を探索的に抽出することができたと考えられる。今後の研究では、よりふさわしい標本から同様のリサーチクエスチョンを抽出すること、例えば過去にゲイ向けの予防情報に何らかの形で疎くて、予防行動実践が阻害されていた人からレトロスペクティブ

に予防障害要因をインタビューする、という手法であれば、「伝聞」の不確かさを回避することができる。

また、今回抽出された結果から、予防情報の伝達や実践を阻害する要因の量的研究を将来行う際の仮説を組み立てていくことも近々の課題である。

## E. 結語

MSMの中には予防情報入手・更新や予防知識の実践を阻害されている集団や、阻害されてしまう瞬間が様々に存在していると言えるが、そのように阻害される背景にはゲイという概念やコミュニティの特性、個人々のゲイ向け予防情報との関わり方の長さや親しみ、それに対する態度、ゲイ生活で利用する媒体の特性によって幅広くしかも全てのMSMに一貫共通しては作用しない障害要因が語られた。

今回観察者の視点も含まれた標本から得られた質的データをもとに、より当事者性の強い標本抽出による量的な研究を行うことで今回あがった予防介入障害要因を明確化させていくことが次の研究の段階となろう。

## F. 参考文献

- 木下康仁、『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法』、弘文堂、2007年  
S. ヴォーン、J. S. シューム、J. シナグブ、井下 理 監訳、『グループ・インタビューの技法』、慶應大学出版会、1999年

表1 概念ごとの分析ノート例

概念名：ゲイ向けの情報のマンネリ化
定義：ゲイ向けに発信された情報に長らく触れてきた場合、その予防情報を陳腐なものとして受け取り、行動化につながらない。
variation
<p>1-44 B：それから、世界エイズデーの話が出たんで、たまたま僕検査に行ったところで、12月1日が平日の月曜日になるんで、11月30日の「前日」に、HIVの無料検査のイベントしますよって関西であったんですよ。たまたまそこで僕は受けて、レクチャーしていただいた方が、危険なリスクのある行為の話ってのを教えていただいて。ゲイとは言わずに来ているので「女性との場合はこうですから」と、いろいろ言ってくれたんですけども、「粘膜感染というのがあります。」ふうん、粘膜ね粘膜ね…「口は粘膜ですから、アナルとかヴァギナとかも粘膜ですから、舐めてはいけません」あーそっかー、口は粘膜なんだ、じゃあ、フェラチオも粘膜同士だから舐めたらよくないのかー、と、僕の中での意識が変わったんですそのときに。ゲイ向けのイベント、というか、予防をしましょうっていうイベントよりは、「よりは」っていうと変ですけど、一般の方のイベントに参加してレクチャーを受けたときにああ、そうかそうかと。まだすっきり入り易かったっていうか。なんて言うのかな、ちょっと言い辛い。一般の方のレクチャーの方が僕にとってはわかり易かったというか言葉が入り易かったっていうか。セックスのやり方にしても、普通に、一般のかたの場合はこんなですよと、話してくれたので 逆にもっとちゃんと聞こうという気持ちになって。…なんかすみません。(paraphrase 一般のレクチャーの方が単純明快?)ゲイゲイゲイゲイ…って感じがしてないんで…名古屋の…ゲイゲイしいことはおっしゃらないのですけれども、全体として男性だったら男性はエッチの対象として話をされるので、それがイヤな訳でもないけれど、やっぱ心の中では「わかってるし」って感じがあるんでしょね私の中に。今回そのエイズデーの検査会の時は一切無く、やっぱ初心に帰って聞けなさいいけないってことで。</p> <p>1-45 E：わかっているからもういいよって思っちゃうんです。そういう人がいるんです。</p>
理論メモ
<p>「わかっているし」…陳腐な情報としてゲイ向けの予防啓発を受け止めることによって、新しい情報や、繰り返される予防情報に伴って伝えられる、その知識を実際行動に移行させる説得メッセージが入っていかないことが予想される。</p>

「介入困難群の予防・保健サービスへのアクセスに関する研究」  
ゲイ/MSM人口のサブポピュレーションの探索

宮島 謙介 (日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 臨床心理士)  
長谷川博史 (日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 代表)  
研究協力者: 大木 幸子 (杏林大学保健学部看護学科地域看護学 教授)

### 研究要旨

関東、京阪神、および中四国を活動地域とするゲイ/MSMコミュニティ活動家、ゲイ産業従事者を対象に、彼らが提供している場を利用するゲイ/MSMの、これまでの予防情報が届きにくかったゲイ/MSMの中のサブポピュレーションについての聴取および分析を行った。東京でコミュニティ活動家およびゲイ産業従事者を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー(FGI)をそれぞれ1回ずつ、中国地方で中四国拠点のコミュニティ活動家とゲイ産業従事者を対象としたFGIを1回行い、それらインタビュー逐語記録からゲイ/MSMの中のサブ人口を28項目抽出した。サブ人口は、ゲイの「場所」としてバーやネット等の媒体を重複させて利用している一方、同じ場にあってもその場を使う動機付けや他者、ゲイというものに対する態度の違いが様々に存在することが明らかになった。ここにおいてゲイ/MSMにおけるインターネットの急速な普及が行動特性の変化に強い影響を与えていることがうかがえ、そのコミュニケーションスタイルによって新たなサブグループを想定することが可能である。

抽出されたサブ人口をそのコミュニケーションスタイルから次のように分類した。

- 1、「場の文化」を重視するコミュニケーションスタイルを志向する人々
- 2、「新しいコミュニケーション」のスタイルを有する人々
- 3、「場の文化」を重視し「新しいコミュニケーションのスタイル」も取り入れている人々
- 4、その他コミュニケーションスタイルではくれない人々

今後は、これらサブポピュレーション分類の精緻化と、予防との関係づけの研究が行われなければならない。

### A. 研究目的

MSMはもっとも研究がなされ、進んだ感染予防対策のさまざまな試みがなされてきており、一定の成果をおさめつつある一方で、引き続きHIV感染予防においてもっとも脆弱な人口集団であり続けており、現行の予防情報や検査等の保健サービスにアクセスできない介入困難群が存在していることはまた紛れもない事実であり、さらなるMSM層の予防介入困難要因の解析が必要である。

本研究では先述研究「予防阻害要因」と平行して、MSM層の中のさらに細分化したサブポピュレーションの活動空間と行動特性を質的に探索した。

### B. 研究方法

個別施策層研究の先行事例研究を踏まえて、MSMの対象細分化(層別化)のためにゲイコミュニティで活動するゲイを対象とした3つのフォーカス・グループ・インタビュー(Focus Group Interview 以下、FGI)調査を行った。インタビューは平行研究「ゲイ/MSM人口の予防阻害要因の探索」と同一のものである。なお、当研究は群馬大学医学部疫学研究倫理審査委員会の審議を経て、医学部長の承認の下に行われた。具体的な施行事実を以下に示す。

#### 【FGI-1】

調査対象者: 首都圏在住のゲイ産業従事者(ゲイを対象としたバー、ショップ、クラブ、ハッ

テン場(出会い系商業施設)、サウナ、出版社、ポータルサイトなどの商業施設及びサービス事業の経営者、従業員  
実施日:平成21年1月25日。  
参加者:5名。

### 【FGI-2】

調査対象者: 地方都市におけるMSM対象のコミュニティ活動(HIV予防、クラブイベント、映画祭サークル等)の主催者  
実施日:平成21年2月1日  
参加者:5名。

### 【FGI-3】

調査対象者: 首都圏のゲイコミュニティ活動(ボランティア団体、趣味サークル、交流団体、ゲイイベント)への参加者  
実施日:平成20年12月27日。  
参加者:6名。

それぞれのFGIの発言はボイスレコーダーで録音された後逐語記録としてテキストに書きおこされ、研究者らによって本研究のサーチ・クエスチョンである「ゲイ/MSMのサブグループ」に沿って、その質問の回答となる発言を抽出し、それらをKJ法に則って類似の発言ごとに取りまとめた。取りまとめた発言群は修正版Grounded Theoryに従って研究者らの協議のもと、共通する「概念」に関する発言のとりまとめ、その概念の「定義」づけを行った。

## C. 研究結果

各FGIでおこされた逐語記録を、個人の特定の可能な箇所を省略して添付資料とする。手続きの例示として「分析シート」を表1に示す。

「ゲイ/MSMの中にはどのようなサブグループが存在するのか」について、3つのフォーカス・グループ・インタビューに共通して、ゲイバーの客とインターネットユーザーの様々な属性や行動動機について特に頻繁に取り上げられていたことが、KJ法による分析によって明らかになった。他にも様々なサブグループがあることが各々の立場から述べられた。

### (バー客)

KJ法分析の結果、ゲイバー客、あるいはゲイバーという場には比較的古くから変わらずに存在する規範、動機付けといった文化があることを述べたものと、最近のゲイバーにおけるコミュニケーションパターンの特徴について述

べたもの到大別された。

(ゲイバーという場の文化についての口述)

### 1「バーで病気や肉体的な話題をすることをタブーにする人達」

知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかかけっこうそういうことが多い。そういう中でHIVの話ってのはまず出ないですよ。…(中略)…。HIVっていうそのものがまだ何となくタブー視しているというか、話すのに抵抗があるような題材になっている、そういうイメージがかけっこう強いですね。(コミュニティ活動家)

バーの中でHIVのことってのはかなりタブーなのではないかと思えます。話はね。…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの?と思う人は多い気がします。(東京、ゲイバーのマスター)

肉体的なことは、やっぱり言わなかったですよ、肥ってるとか痩せてるとか、今日顔色悪いわね、とか。たとえ顔色悪くても…(東京、ゲイバーのマスター) やっぱりHIVとかも含めて、何か、急激に痩せて来たりとか。いちばん念頭にあるのは健康のことです。モテるモテないではなく(同一発言者)

グループで来ると個人的な話ができないのでプライベートで悩んでることが出てこない。一人だと相談事などが出てくる。私も口外しないので。(中四国、ゲイバーのマスター)

昔なら政治・宗教・国籍だった。韓国北朝鮮差別などがあったから。僕たちはそう教わった。今は病気の問題があって、病気のこととかを他人に言うのはベク。(中四国、コミュニティ活動家) 1対1で相談されて話すのはいいけれど、第三者を含めて「あの人はそうだよ」というのは絶対にタブー。(同一発言者)

基本的に病気の話はどの病気も。とくに精神疾患とHIVの問題はとくにタブー。内臓疾患などはかけっこう喋れる。潰瘍になったとかガンとか。(中四国、コミュニティ活動家)

## 2「精神科領域の話題は話ができる人達」

若い子に最近よく教えられたり怒られたりするんだけど。「参加者Bさんこういう言い方をあのお客さんにするでしょ。その人うつだから、うつの人場合はこういうこと言っちゃいけないとか。ま、僕もうつだし、先生からもそういう風に聞いているので、そういう言い方は絶対にタブーですよ」みたいなことを教えられたりします

よ。(東京、ゲイバーのマスター)

精神的なことは聞きます。心療内科の先生から直接「こんな患者さんがいるので行ってもいいですか」とファックスが来たりとか。(中四国、ゲイバーのマスター)

### 3「バーでは個人的なことは聞かない人達」

20年から30年前のバーもそうでしたよね。社章が見えているとママが「だめよ、ウラにして」(笑)。もう確実に本名はいわない。(中略)僕がやっていた15年とか10年くらい前になると、逆に本名が出てた時代。(中略)逆に今は昔に戻っているというか、人がまた増えている分クローズしている人が増えているってことですね、びっくりしちゃうなあ、それは。(東京、ゲイバーのマスター)

ゲイバーなので個人的なことはシークレット。本人が言わない限り。(中四国、ゲイバーのマスター)

(同席のゲイバーマスターをさして)彼はどっちかと言えば干渉しないタイプ。昔からそう。あまりぼんと入っていかない。入ったら自分が潰されるから。悪い意味じゃなくて。だからある程度の間隔をもって中に入らないようにしている。私は口に出さないと気が済まないタイプだから。(中四国、コミュニティ活動家)

### 4「バーでの会話を楽しみに来る人達」

(辛口のおしゃべりについて、ゲイバーの従業員は)言う人はそんなこと気をつけて、なんて言ってもらえないんじゃないですか？それで嫌だったら来なくていいよ、というスタンスだと思います。むしろ僕なんか素人から始まったし今でも半分素人だと思っているので、たぶん昔の…だったら、やばいやばいって思うタイプだけれども。辛口とかできないタイプなので。だけど、たぶん7割くらいママとかは…(東京、ゲイバーのマスター)

(上の発言に続き)小さい店のところは、それを売りにしないと他との差別化ができないから、やっぱりしゃべれるママは、しゃべって叩きつづすんじゃないのかなやっぱり、それを売りにするんじゃないのかな。(東京、ゲイバーのマスター)

あとは最低限、愛情があつての辛口なら。僕も比較的、こいつは、というやつにはバンバン言ってるらしいですね。(東京、ゲイバーのマスター)

### 5「ハンドルネームを使う人達」

少なくとも僕が飲みにいっていた10年15年くらい前よりは、今の方が、名前をどう呼ぼうかと聞いても、ほんとうにハンドルネームのようなことしかいわないお客が多いような気がする。(東京、ゲイバーのマスター)

(最近のゲイバーにおけるコミュニケーションについての口述)

6「バーに必ず複数で来るか、一人で来る人達」  
バーに来店するきかたが固定している。均質な仲間によるグループの交流の場として、バーが利用されている。

一人で来て黙って人の話を聞いて帰る人もいれば、常に誰かとの会話を楽しみたいと思う人もいます。ただ、必ず一人はいつも一人だし、必ず複数で来る人は複数で来ますね(笑)。(東京、ゲイバーのマスター)

メンバーに共通性があると思う。(中四国、ゲイバーのマスター)

(上記を受けて)でも似た者同士な気がする。自分たちの年代からはどのグループも同じに見える。(中四国、コミュニティ活動家)

### 7「バーにゲイ雑誌を読みに来る人達」

店に来て読むのがほとんど。買っているという話はほとんど聞かない。(中四国、ゲイバーのマスター)

### 8「カラオケで、他の客や店子[ミセコ]と喋らない人達」

カラオケもかなり迷惑。歌い出されちゃうとアウト。歌う人は歌ってる、歌わない人は無関心。分かれてしまう。……カラオケがない時代には店子はしゃべってナンボと言われた。だからカラオケ本とマイクが出てくると「アンタ手抜き」って思う。その前にしゃべりな、と思う。(中四国、コミュニティ活動家)

### 9「バーの中でグループ間の交流をしない人達」

今は本当にグループ、2つグループがあったら背中を向けている。混ざるといことがすごく少なくなっている。片方がハイに盛り上がっているともう片方がチラ見していることが多い。前だったらお店の人が話を振ったりしていたけれど、今はついてきてくれない。だから2つの班があつて一緒の話題にしようとするのが難しい。たとえば僕がここで話している。隣の人は携帯で自分の世界に入っている。話を振っても「は？」という感じ。同じグループなのに。1対1でしか話ができない。グループに話を振ってもまとまらない。グループを作っているが我が世界にいる。若い世代、20歳前後の世代はとくにそう。(中四国、コミュニティ活動家)

(上記を受けて)思いますね。グループの中にグループがあつたり細分化している。グループ間を移動する人も少ない。(中四国、ゲイバーのマスター)

## 10「店で相手を捜し、相手が見つかるとなくなる人達」

…好きじゃないんですよ。基本的に自分の店でできるってのは、ありがたいんですけども、冗談半分で言えば、お客同士出来ちゃうとお店に来なくなるから(笑)。それは、自分もそうなんですけれども、彼の店でデキたんですけれども、家飲みとかが多くなったりする。他の人とコミュニケーションするよりは二人でコミュニケーションしたい時間が増えて来るから、飲みにかくなることは判っているし、なおかつそこでいざこざなんか起きたりすると、会いたくないものだから、当然彼の行くところには行きたくなくなる。下手するとか他方だけ、いやふたりとも来なくなる。(東京、ゲイバーのマスター)

「場の文化」と「最近のコミュニケーション」の中間に位置するゲイバー客の属性・行動様式として、以下が分析・抽出された:

## 11「店子[ミセコ]と一対一だとタブーの話題を話す人達」

個人的には、店をやっているときには、相談、ないしは、告知されることはありましたけれども、通常営業で他にお客さんがいらっしゃるときには、比較的禁句というか、あまりそういうことにはならなかったかなとおもいます。二人きりになると異様に言われる、ということは非常に多かったです。(東京、ゲイバーのマスター)

なんかね、深夜遅くなって、人が少なくなってきたら、やっぱり。電話なんかもそうですけれども、ましてお酒なんか入ると、そういう気持ちになって来るでしょう。親密な感じになっていって…。……他にお客がいると言わないですね。ただ、中のマスターってなると、別みたいで。これは私個人でなくても、他のお店のマスターも…(東京、ゲイバーのマスター)

(インターネット(携帯含む)ユーザー)  
今回のフォーカズド・グループ・インタビューにおいて、ネット内での活動を主な活動媒体とする参加者はいなかったが、インターネットユーザー、還元すれば、インターネットを他のゲイ/MSMとしての生活場面に活用する人達、の様子が数多く語られた、我々は参加者のそれらの発言は以下の方に範疇化した。

## 12「自己顕示欲求をネットで満たす人達」

(ゲイの尋ね人ネット掲示板の話題)それは銭湯だったりハッテン場だったり、地下鉄の駅だったり、っていうのが何秒おきにアップされる訳ですよ。それをみんな…目と目が合ったりするじゃないですか。で、自分も(その掲示板に目が合った相手への呼びかけ)書こうと思いつつも、まずは自分のことが書かれていないか探しちゃ

う。……「今日ジムに行ったんだけど、今日ジムにいた人で僕のこと見ていた人はいないかな?」と思って探したら…いた!とか(笑)。友達が指摘することもすごくあるんですよ。「これ、お前だよ」とかねえ。ほんとうによくその会話は出て来るので、かなり高いんじゃないのかな?「掲示板Q」。(東京、ゲイバーのマスター)

(ブログやソーシャル・ネットワーキング・サイトの日記機能で)自分の最近やったことを細かく…あ、そう、みたいな(笑)…(インタビュー:日記を書きたい、見せたい?)というものもあるし、イベントの宣伝はみんな良くやっていますよね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

みんな日記に、やって、ハメ撮りをした写真を載つけて報告している。んで、そのためにセックスをしているような人が、けっこう多いんじゃないかなと思うんです。例えば日記で「今日はハメ撮りできませんでしたごめんさい」とか書いてあって…。別にね、それ、したいんだったら構わないんだけど、見せるためにやってるのかよお前!みたいな。(東京、ゲイ雑誌ライター)

エロ系のだと、カウント・足跡機能とかあるじゃないですか。過激な画像を載つけてるとカウントが稼げるみたいな感じで…結構そういうのを意識して、毎日のように過去画像を…。過激画像をあげたほうが人気者になれるという構造があるので、ちょっとそれがすごい過剰だなと。見ると、あ、こいつ、もしかして…と、本当の知り合いを見つけちゃったりするんですけども、夜と昼とは別行動なのだな、と。(東京、ゲイバーのマスター)

## 13「ヤリ(性行為)目的でネットを利用する人達」

ヤリ専門のSNSもありますよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

「キメ生」コミュニティってのがありまして、SNS-W というみんなが入っているいちばん大きなコミュニティが13000人くらいいて、「キメ生」には400-500人いて。そこをみると今までキメる、ということ意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃっているなあ、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

あるんです。「キメナマ」っていう、自分はナマ派です、という。そもそもSNSでセックスポジションを書くときに「ウケ・ナマ」とか「ウケ・セーフ」というのが選択の中にあるんですよ。そこで、自分はナマっていている人ってけっこういて…、ナマ画像をちゃんと貼っていくコミュニティっていうのが…あるんですよ。(東京、ゲイ



雑誌ライター)

そのSNSみたいに、どんな人がいるのか、わからない訳でしょ？きっと。そうするとき、自分の友達とか自分がいいなと思っている人がそこに入っているか選別できない訳ですよ。そのSNSの場合は比較的わかり易いので、ええっ？この人ったらこんなコミュニティに入っているの？ちょっとパスっていう…別に性的なものでもね、そういう選別があったりしますよ僕は。例えばこの人と出会いたいな、すぐくタイプタイプと思っているけれどもその人の入っているコミュニティを見ると「ええっ？これかよ？じゃあ」(一同、笑)…っていう選択肢はとれるけれども、エッチ系ってのは顔出しとか個人が特定できないじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

とくに携帯サイトの場合はいわゆるセックスネットワーク作り。コミュニケーションをとる必要がない。必要最小限の情報で足りる。その面で携帯のほうがゲイにとって使いやすいのではないか。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 14 「アンセーファーな行動の呼びかけ情報に反応する人達」

(前述の「キメナマ」コミュニティに)そこをみると今までキメる、ということは意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃっているなあ、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

興味があるとそのままそこ(薬物販売サイト)にダイレクトに行けちゃうので、興味の幅が広がってしまうかな、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

ナマでやろうとか、そういうものですね。そういったことが大々的に出回ったりするとそれまで興味の無かった子までやってみようとアクセスすることになる。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 15 「ネットを嫌がらせに使う人達」

ほんとうに嫌がらせで使っている人とかいますよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

嫌がらせもあれば宣伝もあるみたいで。うちはそうでもないんですけども、けっこう頻りに載る店があるんですよ。ハッテン場とかあると、それを「ヤラセ」って…。自作自演。所謂2ちゃんでも、大体は明かされるでしょ。その中で褒める文章があると「自作自演」とか書かれる。(東京、ゲイバーのマスター)

#### 16 「ネット時代でも顔をあわせたコミュニケーションを求めてくる人達」

出会いとエロのために、画像なり、そういうものがインターネットで手に入れば、あとは、まん

がと小説の為に1500円、1800円という金額を、払う人は少なくなりましたね。かつてあった手紙を出版社が仲介してやり取りする通信欄というのは、全ての雑誌でなくなったのかな？(東京、ゲイ雑誌ライター)

そこで淘汰されて、それでも飲みに行くのを大事にしているというか面白いと思っている人達が僕の店に来てくれていると思うのですけれども。ただ、携帯電話ってのは面白いもので、…(中略)…しゃべりながら飲みながら携帯を手を持っているのが半分以上…7割くらい。飲みながら携帯を見て、話しながら携帯を見てるってのが。

(中略)電話もそうだしメールもそうだし。まあ、いいんですけども「何しに来てるの？」みたいな…気がしないでもない。(東京、ゲイバーのマスター)

極端に避ける人はやっぱり関心があるからなんだと思うんですよ。2ちゃんねるでリブたたきをする人っているわけでしょ？そういう人はリブにどこか関心があるからわざわざ書き込みをする訳ですよ。関心があるとかかわり合いがあったとか。そうでない人ははなから手を出さないと論外という感じだし、手も出さないとすよね。(東京、ゲイバーのマスター)

#### 17 「情報の信頼性を確認してネットを利用する人達」

しかしネットの情報って、鵜呑みにすると悪い情報も多いし、見たくない情報も入って来る場合もある。ネットも使わない訳じゃないけれども、ちゃんと根拠のある物で口コミの情報とかセンターYのマンスリーセミナーとかと整合性のあわない物は排除というか、入れないようにしています。(東京、コミュニティ活動家)

例えば2ちゃんねるなんてのを見ると、僕は気分が悪くなるので見ないようにしているんですけども…僕の場合はですよ…、やっぱり取捨選択はしていますね。(東京、コミュニティ活動家)

逆に言うと情報があふれて過ぎていて、イベントにしても昔はフライヤーだけだったりしましたが、今は知るきっかけが無いと、自分から能動的にネットでは探さない、欲しい情報が出てこないと思います。自分から興味を持ってきている人にとっては探し易いが、なんとなく漠然と探したい人にとっては、情報があふれすぎていて、知りたい情報を情報はむしろ探しにくいように思います。(関西、コミュニティ活動家)

地方とか行くと、ポータルUの同性愛のページを作っているかた、過去は編集者Uさん、今は編集者Vさん。やっぱり、あの辺の人達の知名度が高いですね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

「まずその人住み」というよりも、グーグルとかで検索をして、STD、H I V、ゲイとかって入

れて、その人に行き着くって感じなんだろうな。その人に何かあったら相談するっていうのではなく、まずなんか自分に症状が出て来て、それで検索した結果その人物が出て来て、その人のバックボーンを読んでみたら、この人にだったら相談してみようかな？というひとが大半なんじゃないかな？僕らの中で人物がそんなにあがってこない、ということは、そんなに傑出した人物が今いるとは思えないですね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

## 18「秘密をより保持できるという理由で利用を好む人たち」

同じ理由から同じネットでもPCよりも携帯電話と使う傾向が強い。

自分のことを隠しながら出来ますよね。べつにボンとコミュニティに入ったからと言って自分のことが判る訳じゃないですか。(インタビューア: ネットでは匿名であることは重要?) ある意味重要。(インタビューア: 匿名であることは阻害要因でもあるのでしょうか?) 昔あった文通欄の回送は絶対に自分の名前と住所を書かないと届かなかった。でも今は別に、サブアドレスとかメールアドレスはいくらでもとれるし、捨てることもできます。(東京、ゲイバーのマスター)

PCを必ずしも持てるわけではなので、恐らく個人で持てるのは携帯だろうと想像できる。学生の情報の取り方を見ていると携帯サイトしか見えていないと思わせることがある。使う時はPCを使うけれども主として使うのは携帯端末だと思う。親元にいれば自分のPCでなければ危険でしょう。アクセスするのは。(中四国、コミュニティ活動家)

必要最小限のことでいい。ましてや普通に家に帰ってPCということになると面倒。自分で持っている携帯で、仕事中でもできる、となることは想像がつく。(中四国、コミュニティ活動家)

直接聞いてはいないが、レポートなどを見ているとパソコンを使うのは最低限のようだと感じる。情報の件でいえば地方は人間が少ない、情報が少ないから都会に比べると少ない情報でも個人が特定される恐れがある。(中四国、コミュニティ活動家)

個人的にはネットが身近でなかった時は雑誌に頼らざるを得なかった。危険性があったから。ネットが身近になると雑誌を買わなくても済む。雑誌の情報はネットに載っている。また雑誌をネットで買えるので本屋で買わなくなった。雑誌を買ったよという話を周りで見聞きしなくなった。袋にバックされて立ち読みできなくなったから買ったと聞いたことはあるが。(中四国、コミュニティ活動家)

## 19「一般的な情報や交流を得易いのでネットを利用する人達」

イベント情報、イベントであるとか映画祭、パレード…、あと個人的に行くライブのイベント、ゲイのシンガーの方やプラスバンドの演奏会行きたいねというと思ったら一応それで確認できる、いちばん早いでしょう。以前は口コミ、お店に行って劇団の人が来てフライヤー置かせて下さいとか、チケット置かせて下さいって言って情報をもらうしかなかったので、狭い情報だけだったんですよ。最近はSNSとかでコミュニティで掲示したりしてくれてるので。割引チケットは無いんですけども、日時場所がはっきり書いてあるので重宝しています。(関西、コミュニティ活動家)

昔はですね、雑誌を買う目的が、エロ目的よりは情報だったんですよ。ところが、その情報が遅い、雑だったのが多くなって来て、そういう理由で雑誌を買わなくなりましたね。ナイトイベントばかりがあって、演奏会であるとか、そういうのは載らないとか、小規模だと載らなくなったのでしよし、イベントする人が雑誌に連絡すれば載せるんだろうけれど、雑誌側が去年はやったけど今年はどうなの？とか探しに来ることはまずないような編集方針になったらしくて。それまでは雑誌を当てに過ごしていたのですけれども、もう当てにならないよという印象になってきました。いちばんは、関西に住んでたら、口コミが当てになるんだけれども、来年また同じイベントを探そうとすると、去年それを聞いた友達に会わないと今年の情報は得られないという不便がありますので、やっぱりネットかな…ということになりますね。僕がさっき言ったように能動的に知ろうと思うなら、ネットがいちばん便利ですね。(関西、コミュニティ活動家)

ネットを使って自分でモノ書いたり発表したりというのをやって、それを使って交流している人ってのが自分の周りでは一定数います。あと週一回集まりがらみの集まる場所があるので、そこで会話をして酒を飲んでと言った小ぢらいミーティング、友達サークルみたいになっている交流があります。知る限りではそこでセックスは無いようですね。本を出している核になっている人をハブにしてつながっている人間関係というのが一個あるので、その人の日記にコメントすることによって知り合い同士にとかなるとか、そういう風なつながりが生まれています。(東京、ゲイ雑誌ライター)

旅行先の情報収集とか、「今度どこそこに行くんだけれども、友達紹介してくれ、いい店あったら紹介してくれ」行き先は国内国外問わずですけども。日記でつながっている人に求めたり、あるいはそういうコミュニティに入って質問した

りとか、そういうのってあると思います（東京、ゲイ雑誌ライター）

雑誌の広告と言えば、原稿つくってデザインして、出版される2ヶ月前くらいに中身が固まってしまう。ところが今は、お店もいろんなイベント、あるじゃないですか。自分のお店ホームページとかマスターのブログとかあれば、もうそこで「来週こんなイベントしますよ」といえば、常連さんとか興味のある人はすぐみる。それにマスター本人が管理できるから。…（中略）…プロバイダーもサーバーによっては無料で、有料としても数千円で…雑誌でウン万円払って広告を出す意味がなくなってしまいます。（東京、ゲイ雑誌ライター）

## 20「地方ゲイは少ないのでネットの中でも特定される、と感じる人達」

あるサイトでは携帯の機種名が表示される。それにプロフなどがあると「あの人かな」と思い当たってしまう。だから極力載せる時にはバレたくない心理が働くのでは…時々プロフをコロッと変えたりする子がいるが、書き込みの内容で「その子だろうな」と想像がつく。絶対数が少ないから。（中四国、コミュニティ活動家）

（上記を受けて）ゲイの絶対数が少ないので、いちど出てしまうと一気に拡がってしまう。（中四国、コミュニティ活動家）

（雑誌読者）

## 21「雑誌を読まなくなった人達」

とりわけ出会いとエロスへの需要が小さくなっている。

雑誌は読まれなくなりましたね。……出会いとエロのために、画像なり、そういうものがインターネットで手に入れば、あとは、まんがと小説の為に1500円、1800円という金額を、払う人は少なくなりましたね。かつてあった手紙を出版社が仲介してやり取りする通信欄というのは、全ての雑誌でなくなったのかな？（東京、ゲイ雑誌ライター）

（発言者が担当したゲイ雑誌は）執筆陣が教授とか研究者みたいなひとが多かったの、わりと研究目的で学生さんが読んでいたりとか。権利に関すること、病気に関すること、文化に関すること、お金に関すること毎回テーマを変えて特集を組んでいました。（東京、ゲイ雑誌ライター）

捨てるのがめんどくさいって言うか。なんかこう…雑誌を捨てるのって別になるじゃないですか。そうすると「あんな本」みたいのが（笑）。モロじゃないですか。これ捨てるの大変だろうなー、そっちのめんどくささが。（東京、ゲイバーのマスター）

あと写真やなにかがDVDみたいなとタイア

ップしてるので、宣伝の写真が非常に多くなっててなんかこう、…わざわざ買わなくても別に情報としてはもうわかっているようなものがたくさん載っている、ということも、たぶん売れなくなったひとつの要因なのでしょうね。（東京、ゲイバーのマスター）

## 22「雑誌の能動的に予防メッセージを入れることができる特徴に注目する人達」

病気の話、媒体の特集で取り上げたことがあって。（中略）それを求めていた読者からはいい反応があったと聞きます。で、別の媒体ですが、だいぶ前なのですが生とかリスキーセックスの特集をあるゲイ雑誌がやったときに、この特集をこの雑誌で取り上げちゃいけないんじゃないの？という議論を一回したことがあって。その辺がもしタブーがあるとしたらひとつリスキーセックスって言う話と、病気の話…媒体によってですよね。…後はそう、エロ目的が無い媒体は受け入れられる。エロを期待される雑誌の場合それは萎えさせるコンテンツになっていけないって言う、話があったんだけど、逆にその上にリスキーな行為ばかり振って、煽動するのも良くないんじゃないか。焚き付ける可能性もあるから、エロコンテンツがある雑誌だと、リスキーな内容は行わない方がいいんじゃないの？というはなしは、一回議論になりました。（東京、ゲイ雑誌ライター）

私の関わっている雑誌はもう13年、創刊以来HIVのページがずっとありますから。治療の現状とか、感染したひとの日常とか。ま、それは情報と…（中略）。だからその常にエロと現実のリスクの情報は、ひとつの本に載ってはいませんが、どこを読むかは読者のかた次第なので。例えば小説をまるで読まない、グラビアとコミックしか読まない人がいるように、HIVに関するページはまるで飛ばすと、いうのも。（東京、ゲイ雑誌ライター）

それが雑誌のいいところじゃないでしょうか？バーではお店の広さにもよりますが、その話をして、聞きたくない人にも聞こえちゃう訳でしょう？でも雑誌の場合は一人で読むものですから、イヤなところは飛ばせばいい。そのへんは媒体が違うのでいっしょくたに語れるものではない。タブーってのが雑誌にはそもそも無いんじゃないですか？それはモロ出しはNGとか、法律的なタブーはありますけれども、「雑誌」なので「雑」なので、何が載っていても、どんなコンテンツが載っていてもよい訳で。（東京、ゲイ雑誌ライター）

（クラブ客）

## 23 「音を指向してクラブに行く人達」

言語でのコミュニケーションは少なめ

クラブではそもそも、面と向かってしゃべるというスタイルを取らないですよね。「ワーお久しぶり」とかいて、踊って、お酒飲んで、下らない話をして帰るという形なので、トピックが出て会話をしている感じではない。だから例えばそういうお店とか、僕の友達も大学の時からの付き合いでクラブに行ったり昼間も会っているという友達関係も多いですが、昼間話す内容をクラブで話すかっていうとしないですよね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

クラブ好きな人ってのは、別にゲイのやつだから行くって訳じゃないですよ。クラブ好きだから、好きな人が廻っているから行く、ということであって、ゲイであろうと無かろうとあんまり関係ないと思います。(東京、ゲイ雑誌ライター)

今は、音っていうものに対してものすごく…「あの音がいいから」っていうのが…お店でも話していますけれども、「あの音がいい」てのは、僕はもうわからないのね。だけど「あのDJが廻すあの音ってのがすごくいいんだよね」…だからクスリとかが、わからないですけれども、今のクラブの中でどのくらいドラッグが出回っているのかはわからないですけれども、少なくとも僕らが行った15年前20年前に比べると、もうそれは、ものすごい差があると思いますよ。クスリを使っているという。(東京、ゲイバーのマスター)

## 24 「出会いとセックスもクラブへ行く理由のひとつである人達」

さっき話した勉強会の活動をしている中で、知識はあるんだけどそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかかけっこっていうことが多い。そういう中でHIVの話をするのはまず出ないですよ。(東京、コミュニティ活動家)

それ(クラブでのゲイナイト)はありますよ、それはそれで。それは踊りにいくというよりも出会いにいく。あわよくばヤッチャおう。そういう理由であって。(東京、ゲイバーのマスター)

## 25 「サークル(ヤリ以外の)人達」

セックスの出会いとエロスを除外したゲイ/MSM同士の会合は拡大しており、インターネット媒体の特性を生かして、地方へも広がっているという口述が得られた。

自分とは好みの全然違う人とあえるので違う世界が見る事が出来て勉強になりますね。パレードもそうですよね。普段の交流では熊ばかりしか来ないので、こんなデブばかり集まるんですけども、パレードでいるんなら、女の子や家族

の方が一緒に歩いたりとか。(関西、コミュニティ活動家)

自分の周りだけを見ると、わりといますね。入っている、入っていた、複数のサークルを掛け持ちしている人が多いです。(東京、ゲイ雑誌ライター)

広がっていると思います。インターネットを通して、スポーツもそうですし、音楽系のサークルはものすごい数ある。後はあらゆる…お茶の会とかアニメ好きとか旅行好きとか、細かいところではマラソンとか。そういうのは例えばSNS-0のコミュニティとかそういうもので、誰か興味を持った人の入っているコミュニティを覗いてみることによってそこにどんどん入っていくという、そうやって広がっているの、増えているんじゃないですか?もう、ネットが無かった時代には想像できないくらい、きっと広がりはあると思います。だって、せいぜいお店に飲みについてそこでバレーボールのチームに入るとか、その程度だったでしょ。あとはね、雑誌を読んでいる人だけが、その雑誌を通じて何かの会に入るけれども地方に住んでいる人は参加できなかった、昔は。今はもうちょっと身近になってますよね。地方の人はネットをみてお店に来て、昨日この会合に参加したんだけど、っていう話はすごいあるので、すごく変わったと思います。(東京、ゲイバーのマスター)

雑誌側から見てもそうですよね。特にその変化は都市部もそうですけれども、地方の方がより変化が大きいようです。地方都市ではバーが一件も無かったり、あっても1-2件しか無かったりして、その街の中の人達の出会いも情報も少なかったのが、いまは、都会と地方の情報格差と言う点では埋まった、…「望めば」ですが。(東京、ゲイ雑誌ライター)

## 26 「ドラッグユーザー」

脱法ドラッグを未だに販売しているヤリ部屋もありますよね。それが本当に効くかどうかはわからないですけれども。「タチサブリ」「ウケサブリ」がセットになって入場料いくらみたいな場所もありますし。そういうところでそういうサブリを飲んで物足りなくなった人が本格的な方へ進んでしまう、という例もあって。よく聞く話で、どこそこのヤリ部屋の周りには警察が張り込んでいるよ、とか。出て来ると職質受けたとか、ある日バット踏み込まれて、そこにいた全員が尿検査でおしっこ取られたとか。そういうのは実際にありますし。知り合いのパートナーがほんとうに捕まったりもしていますし。(東京、ゲイ雑誌ライター)

やったことがある人、やっていた人、やっている人含めて。比較的「自分は大丈夫だ、捕まらな

い)も含めて、「そんなに大した中毒にはなっていないから大丈夫だ」って言う風になっている人が多いですね。自覚症状が無いというか、あるというか。「自分は自覚しているのでこれくらいだから大丈夫だ。いつでも止められるし」という。…やめてないじゃん(笑)。もちろん過度にはまって非常に苦しんで逃れられない人もいます。ほとんどそういう人は最初はセックスのパートナーからやってみないと言われて、初めて、そういう風になっちゃう。やっぱり、訳わかんなくなっちゃうって言うことだから、効くんですよ。(東京、ゲイバーのマスター)

マリファナなどは以前から違法だから「やりました」と言う人はまずいない。ゲイの間で流行ったゴメオ、ラッシュなどを経験したと言う子はけっこういる。(中四国、コミュニティ活動家)

## 27 「ゲイ嫌いのゲイ」

イヤだと思ふことって、ゲイってゲイが嫌いな人が多いんですね。それはちょっとイヤだなと思ふことがあります。(東京、コミュニティ活動家)

男の人とセックスするとはっきりしたのは高校1年生の時で、…(中略)…その時点でもまだ僕自身がゲイだという…男の人しか愛さない、セックスしない、とは思ってなくって、男の人ともセックスする…バイセクシュアルなのか?という風に思い込んでいたという、思い込むようにしていて高校時代大学時代は女性とつき合ったりセックスしたりして。そうやって自分のセクシュアリティを受け入れるのを逃げてたってのもあったのですけれども。それがずっと続いて24、25のときによやくはっきり自分がゲイです、と受け入れた、ってのが「自覚」になります(関西、コミュニティ活動家)

## 28 「クローゼット・ゲイ」

比較的ウチに来るお客さんで、でも、ゲイバーにはほとんど行かない。で、既婚者。ハッテン場にはものすごく行く。ゲイの友達を持たない。(中略)そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいるんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローゼットで友達を持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気持ちいいセックスができればいいんですよ。ゲイとしてのプライドを持たないし持ちたくもないし。一生クローゼットの中で楽しく幸せに、だからゲイ・リベレーションのムーブメントとかおこ

ると不愉快になるんですよ、彼。そういう人ってのはかなりいて実は。それはもう眠っている訳ですよ。結婚してたりして普通の顔して社内で、かなりいい会社でいい役職に就いたりして。ただ、コンソソッとネットで知り合ったのとセックスやりまくったりするひとがけっこう多いらしいんですよ。で、そういう人がやっぱりHIVになる。けども、それを調べるんだけども誰かに相談しようと思っても、その人がゲイの有名人とかだったりすると、この人とつながってしまうとなんか自分の情報が漏れちゃうかもしれないから、つながないようにする。そうすると、あんまりゲイが行ってない病院を探す。で、当然そこで、「あなたは同性と性的接触をしましたか?」と聞かれても「したことはありません」という、違う情報を答えて治療を受けようとする人もかなりいると聞いて僕はびっくりしたんですけども、現実にはあると思う。いつも思うんですけども、バーとかに出入りしている人間は本当にごく一部で、そうではなくて、まったく「ゲイ」という言葉すら口にすることも無く、だけれども男とだけセックスをして…という人のほうが…ゲイの中では8割とか占めるんじゃないですかね。そうすると問題はものすごく根深いし。それは止めることはもうできないかもしれないというくらい…。それは社会がそうさせている部分もありますけれども。だけど、それになんか甘んじているというか、それでいいと思わせる風潮が日本にはありますよね。すごく差別されている訳じゃないし、普通に生活できる訳じゃないですか。何とか楽しく。楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては。ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

## D. 考察

本研究では、調査手続きの項で述べたように、ゲイ/MSMの商業施設や当事者組織・当事者支援組織で活動してきた参加者から見て、ゲイ/MSMの中にはどのようなサブポピュレーションが存在するのか(リサーチ・クエスチョン)を聴取、分析を行った。

バー、インターネットという場を主要な場所として、雑誌、クラブ、サークルという空間が抽出された。そもそもコミュニティ活動やバーや雑誌という、既に存在の明確な「場」から選ばれたFGI参加者の観察によるサブポピュレーションであるので、場所にちなむサブポピュレーションが抽出されるのは自明のことであったが、その「場」の中には単一的とは決して言えない、様々な行動様式や規範を持つサブ

ポピュレーションが抽出されたことは新しい知見である。場の中でもとりわけインターネットは、一部のサブポピュレーションに「バー」という場の中で出会いの道具として活用されたり、出会いやセックスが主要目的ではないゲイ向けサークルという「場」が地方にまで広がっていったことに寄与したりと、他の主要な「場」との利用と重複していることが分析された。一方、雑誌はネットという出会いとセックス目的によりかなった媒体にシェアをとられている一方で、バーに雑誌が置かれていたり、出会いやエロスとは無関係、ときには拮抗する予防情報などをあえて併せて掲載できる特徴が評価されていたりと、一定の役割、現代的な役割を担っていることがわかった。

同じ「場」の中にもその場によって来る動機付けや行動様式が異なるサブ人口が存在する具体例として、ゲイバーの客は、お酒やコミュニケーションを楽しみに来る人も入れれば、ネットを併用して出会いの場としてバーを利用する人もいる。客同士でHIVの話題は話しにくい雰囲気がある一方で、店子と一対一でならば是非HIVに関する相談をその店子さんとして人達もいる。ゲイバーでありながらゲイのゲイ嫌いという人も来店する、といった具合である。サブ人口の中にも、別研究で抽出された予防行動の阻害要因と重複する特性、例えば匿名性(こっそりとセックスの相手を探すことと、秘密保持のメリットからネットを利用する人達と、ハンドルネームをバーで使う人達)、没コミュニケーション(あやふやな情報のまま正しい情報を確認できないことと、グループ間同士では会話が成り立たないバーの客と)、そして、その時その場のセックスをもっとも大切なものとする(ヤリ目的でネットを利用する人達)といった事象と共通する要素が数多く観察される。

また、サブ人口の中には、阻害要因の中では抽出されなかった、出会いとエロ以外のサークルと言ったゲイ/MSMの場の広がりや、予防情報の信頼性を確認するために工夫をする人達といった予防からは中立的あるいは親和的なサブ人口や、「音を指向してクラブに通う人達」「自己顕示欲をネットで満たす人達」といった、予防情報入手阻害や予防行動阻害と近い位置にあるように見えながら平行研究のリサーチ・クエスチョン(=予防阻害要因は何か)で抽出された要素とうまく整合しないサブ人口も抽出された。

これらのサブ人口を概観するとき、ゲイ/MSMにおけるインターネットの急速な普及が

行動特性の変化に強い影響を与え、コミュニケーションスタイルによって新たなサブグループの想定が可能であることがうかがえた。

そこで抽出されたサブ人口をそのコミュニケーションスタイルから次のように分類した。

- 1、「場の文化」を重視するコミュニケーションスタイルを志向する人々
- 2、「新しいコミュニケーション」のスタイルを有する人々
- 3、「場の文化」を重視し「新しいコミュニケーションのスタイル」も取り入れている人々
- 4、その他コミュニケーションスタイルでは括れない人達

1の人達は従来のゲイタウンを起点とする予防介入活動によって既に介入が可能となっており、MSMの中の介入困難層を抽出する上では2、3の新しい「コミュニケーションスタイルを持つ人達」をさらに詳細に分析することが必要と思われる。

## E. 結語

雑誌やバーからネットやサークルへという昨今の流れはある一方で、上記のゲイの集う場所や媒体を利用するMSM人口は重複している実態が示唆された。また、同じゲイの集まる場を共有するもの同士であっても、行動様式や意見・態度が様々であり、一方が他方を相容れていないという状況も起こっている。出会いとセックスの利便性から、ネット文化との連動から、個人が特定される懸念からなどの事情でゲイの集う空間の参加者の匿名性も維持されている。そうした中でHIVに関する相談や情報開示は店子と一対一ならしたいけれども他のゲイ/MSMのいるところではできないという行動様式のサブ人口も特定された。

今後の研究デザインを変えた手法によりさらに今回あがったサブグループ、特にコミュニケーションスタイルに特徴を持つサブグループを明確化させ、実際のMSM向け、ひいてはその他の予防個別施策層の予防介入に還元されることが期待される。

## F. 参考文献

- 川喜田二郎『発想法 - 創造性開発のために』中公新書, 1967年  
木下康仁『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法』, 弘文堂, 2007年  
S. ヴォーン, J. S. シューム, J. シナグブ, 井下 理 監訳,『グループ・インタビューの技法』, 慶應大学出版会, 1999年

表1 分析シートの一例

サブ人口概念：「バーで病気や肉体的な話題をすることをタブーにする人達」
定義：バーの中で相手や第三者の健康状態について言及することがタブーとなっており、その一環として、HIVについての情報交換がなされない。とりわけHIVにまつわることは他の健康状態に関する話題よりもタブー性が強い。
variation
知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかけっこうそういうことが多い。そういう中でHIVの話ってのはまず出ないですよ。…(中略) …。HIVっていうそのものがまだ何となくタブー視しているというか、話すのに抵抗があるような題材になっている。そういうイメージがけっこう強いですね。(コミュニティ活動家)
バーの中でHIVのことってのははかかなりタブーなのではないかと思います。話はね。…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの?と思う人は多い気がします。(東京、ゲイバーのマスター)
肉体的なことは、やっぱり言わなかったですよ、肥ってるとか痩せてるとか、今日顔色悪いわね、とか。たとえ顔色悪くても…(東京、ゲイバーのマスター) やっぱりHIVとかも含めて、何か、急激に痩せて来たりとか。いちばん念頭にあるのは健康のことです。モテるモテないではなく(同一発言者)
グループで来ると個人的な話ができないのでプライベートで悩んでることが出てこない。一人だと相談事などが出てくる。私も口外しないので。(中四国、ゲイバーのマスター)
昔なら政治・宗教・国籍だった。韓国北朝鮮差別などがあったから。僕たちはそう教わった。今は病気の問題があって、病気のこととかを他人に言うのはベケ。(中四国、コミュニティ活動家) 1対1で相談されて話すのはいいけれど、第三者を含めて「あの人はそうだよ」というのは絶対にタブー。(同一発言者)
基本的に病気の話はどの病気も。とくに精神疾患とHIVの問題はとくにタブー。内臓疾患などはけっこう喋れる。潰瘍になったとかガンとか。(中四国、コミュニティ活動家)
理論メモ
一対一だと話せる、話したい、しかしグループ空間では話せない、という観察が重複している発言もある。個人的なことは聞かない話さない、広い空間で人物が特定される心配を持っていること、嫌がらせにそれが使われたりする心配等とも関係がありそう。

(添付資料 1) コミュニティ参加者 フォーカス・グループ・インタビュー逐語録 (抄録)  
2008年12月27日

- 参加者A 京阪神コミュニティ活動家 (予防啓発系)。  
参加者B 全国規模団体会員 (京阪神在)  
参加者C 東京コミュニティ活動家 (政治、職業集団、予防啓発系)  
参加者D 全国規模団体会員 (東京在)  
参加者E 東京コミュニティ活動家 (若者向け)  
参加者F 東京コミュニティ活動家 (予防啓発系)

Interviewer: (質問) HIVという言葉聞いてどんなイメージが浮かびますか?

参加者D: 僕が20年くらい前に初めてゲイの人に会ったその人がHIVを持っておりまして、僕は自分のセクシュアリティとして認識は非常に早いうちからあったんですけど、実際の行動は遅くて、就職してしばらくして20年前にアメリカに行ったときに、初めてゲイの人に会いました。…(中略)…そのあとお付き合いをした人がHIVを持っている人でして、そういうことがあって、もうHIVというのは、もう自然なんですね。僕の中では特別な病気という感じはなかった。そうするとやはりあの、HIVの相談を受けることがものすごく昔からあったんです。縁というか、遭遇する確率が高かったので、ニュートラルに受け止められているんじゃないかな?と思います。差別感とかそういうの無い。

参加者B: HIVとエイズの違いとかも全然なんにもわかんないし、単に病気で、うつったらヤバイと思っているだけです。それは昔も今も変わらない。ただ病気は予防しなきゃならないと努力しているんですけども、自分の周りにそういう病気を持っている方がいない、そういう状況でずっとゲイの世界に入っているんで、人ごとみたいな感じで…(中略)…で、つき合った人の縁のあった方がHIVに感染されていた方だったので、それが縁で話を伺うことは多くなったんですけども。基本的にも自分としてはHIVであろうがエイズであろうがそういった病気は、それ以外の感染症もあるじゃないですか?性病に関して、予防は自己責任なんだから、ヤラなあかんだろうと。だから、風邪引くからちゃんとうがいしよう、手を洗おう、そういう感じでしか僕は捉えてないんですが。

参加者C: HIVに限らず他の病気も予防しなきゃいけないし、逆にどんな病気であっても感染すれば生活に支障が出るのだから予防できるものならば予防した方がいいし、それで何かしら病気にかかって困っているのであれば手助けはするし、そういう意味ではニュートラルなんだけれども…(中略)…感染リスクが高い人のイメージっていうのを見ていったときに、ハイリスクな行動をすることの裏かわりに、すごく自己肯定感の低さがあるような気がして、やっぱり自己肯定感ってのは大事なことだと。

参加者E: 僕の関わっている団体が活動を始めてもう六年になるんですけども、イベントをやった時にHIVに関するクイズを一問出すんですけども、最近、初めてゲイに接する人、初めてゲイのコミュニティに、団体に接するという参加者がHIVに関する問題を出されたときにだんだんと正解というか、正しい知識を持ってきた人が、増えてきたな、という感覚がある。だんだんとHIVとかエイズに関する情報が流れて来るようになってきて、浸透しているのかな?と思うんですよ、一般的な社会では。ゲイの中とはまた別に、社会の中には浸透していると思うんですよ。ただ、ゲイの世界にどっぷりとはまっている人というか長い人、例えば二丁目で飲んで例えばセックスの話とかになったときに、またちょっと感じが違うな、と思うことがあるんですよ。ゲイの人に対する正しい知識の浸透の度合いというのがまだ隔たりがあるかな?と。…(中略)…なんかちょっと、ゲイの中では情報が先走りしている感が。情報が正しい情報ではなくて背びれ尾びれがついて広がっているような感じがします。

参加者D: そういうことが先週末ありまして。ある方とちょっとお話ししたんですけど、検査を3ヶ月ほどしていると。検査してるから大丈夫、とにかくゴムつけなくてやってくれ、とその方おっしゃったんですよ。…(中略)…その時、3ヶ月ごとに受けているから安全って、そういう風に思っている人がほんとうにいるんだ、と僕は感じたんですよ。

参加者F: ……さっき話した勉強会の活動をしている中で、知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかかけっこうそういうことが多い。そういう中でHIVの話ってのはまず出ない。バーのママにインタビューをたくさん取ったことがあるが、その中では、お店の中ではそういう話、お客さんから相談されることはあるんだけどもお客さん同士ではどうい話をすることはまずないなあと。そういった中で情報が一人歩きしちゃっていて、参加者Eさんも話していましたが、あやふやな情報のままぼんやりとボールを持っているから、それは正しい情報かどうかかわからないけれども正しい予防につながっていないのかなってところがあって。HIVっていうそのものがまだ何となくタブー視している



というか、話すのに抵抗があるような題材になっている、そういうイメージがけっこう強い。HIV、病気恐いよね、かかってしまったら大変だよね…これくらいだったら平気なのかな？としたほんやりとした情報のままでもみんなそれを話す場がないから確認することも出来ないし、そうしたままの情報でセックスに及ぶときに流されるかもしれない。病気にに対する意識…一歩引いた意識というのは、知識とか、正しい啓発、予防活動、…個人への予防にはつながっていないのかな、という気がする。あとそれも含めてそういった話をしない、経験をしていない人が、実際HIVになってしまったあとも、ちょっと心の問題というか、それをどうその人が捉えているかが影を落とす部分ではないかなと思う。実際どうしているのかわからない。結果によっては自暴自棄な行動につながってしまうことにもなるかもしれない。情報は届いているんだけど、その情報をみんながどう捉えているのかっていうのがまだうまく…。使ってほしい感じて使ってもらえてないのかなど。知識はあるが意識までは高まらない。

参加者B：僕自身がヤリ部屋に行くんですが、…（中略）…そのなかで、若いお客が来店してその方は…、田舎の方に住んでいてあんまり遊びに出てきてないっていう、知識のカタマリの方で、フェラチオしてほしいって言ったときに、ゴムをかぶせたんですよじぶんに。周りのみんなが引いたんですよ。だから、僕ら、僕も含めてなんですけれど、その場に来てたお客さんがフェラチオは生でやってもいい。で挿入はゴムかぶせなきゃいかんという風な感覚をみんな持ってた。でも実際は粘膜感染になるんで実はちゃんとゴムかぶせてフェラチオする方がいいとは、わかってるんですけど、それがどうしても出来ないというか、なかなかそういう気にはなれないっていうのは、僕もやっぱり、どうしてもある。だから、なるべく避けるようにはしていますけれど。彼がほんとは正しいかもしれないけど、実際の現場、っていうかそういうところではそんな風になってるんですよ。ベテランさんのほうも知識がっていう話と被るが、何ヶ月かおきに検査してるから大丈夫って訳でもないけれど、リスクが低いからまあいいかなっていう感覚は僕の中にもちよつとはある。

参加者B：世界エイズデー前後に HIV の（ゲイ向けではない一般向け）無料検査のイベントが〇〇であつたんですよ。たまたまそこで僕は受けて、レクチャーしていただいた方が、危険なリスクのある行為の話つてのを教えていただいて。ゲイとは言わずに来ていたので「女性との場合はこうですか」と、いろいろ言ってくれたんですけど、「粘膜感染というのがあります。」ふうん、粘膜ね粘膜ね…「口は粘膜ですから、アナルとかヴァギナとかも粘膜ですから、舐めてはいけません」ああーそっかー、口は粘膜なんだ、じゃあ、フェラチオも粘膜同士だから舐めたらよくないのかー、と、僕の中での意識が変わつたんですよそのときに。ゲイ向けのイベント、というか、予防をしようっていうイベントよりは、「よりは」っていうと変ですけど、一般の方のイベントに参加してレクチャーを受けたときにああ、そうかそうかと。まだすっきり入り易かったっていうか。なんて言うのかな、ちょっと言い辛い。一般の方のレクチャーの方が僕にとってはわかり易かったっていうか言葉が入り易かったっていうか。セックスのやり方にしても、普通に、一般のかたの場合はこんなですよと、話してくれたので 逆にもっとちゃんと聞こうという気持ちになって。ゲイゲイゲイゲイ…って感じがしてないんで…（ゲイ向けの検査においては）全体として男性だったら男性はエッチの対象として話をされるので、それがイヤな訳でもないけれど、やっぱり心の中では「わかってるし」って感じがあるんでしょね私の中に。

参加者E：わかっているからもういいよって思っちゃうんです。そういう人がいるんです。

参加者A：さっき質問を受けたときに、まったく浮かばなくて、所属団体が長くセクシュアルヘルスのことをやっつて、仕事としてやっているので、空気のように思ったんですけど、…（中略）…一つは情報は、たくさん知識は行き渡ってますよ、という人が必ずしもそういう行動には結びついていないっていうのは、データでずっと僕らも持ってたんですけど、むしろ逆に、知識があがっていくほど…抜け道探しというか（笑）。ココがコウなら、ここまではいいでしょ？という風に判断が自分で出来るようになっていったりする。知識が無い頃はここで信じればいい、みたいな。ちゃんとコンドームが使える。フェラチオのときに。そういう時も使おう、っていうところできっちりはっきりわかっているのだけれど、どんどん…間を探し出すようなことも起こっているような気がしたりもする。

参加者A：あと、ノンケさん向けのお話がわかり易かったという話ですが、僕らは「これで絶対大丈夫です」、とはやらないから、セーファーセックスって言い方をするからには…いわないんですけども、コッチの方が今やっていることよりもマシですよ、という情報の出し方をしているんで、ここが絶対のラインだ、という出し方ではないので、余計わかりにくいのか？っていう気も今した。要らん情報といえば要らん情報。でも、相手によって必要な情報が違うだろうから、いつも活動していてもそうですけど、ほんと、その人にびったりした情報を出さないとまったく逆の効果を生み出すことがあるので、ここはいつも難しいなと思う。でも、たくさんいるから、マスで…大量な投げかけをしたいけれど、実際は細かい情報伝達じゃないと正しい効果は生まれない、といういつもジレンマがある。ほんとうに生掘りが好きでずっと言っている人にはそれ向けの情報がある訳です。それよりもコッチの方がまだいいよね、コッチの方がリスクちょっと低いとかね、これからセッ

クスをする人向けにはこうやるのがいちばんいいよ、っていうとっから始まってっていう話し方になるだろうし。言う内容がまったく逆だったりする。生掘りする人にコンドームつけた方がいいよっていうのは逆効果だったりするので。「もう聞きたくない」みたいになっただけから。

参加者F：それだったら生でやるにしてもこうする方がまだ…

参加者A：せめて外で出そうよ…とか（笑）

参加者F：ていうところが必要だっところでしょう。

参加者A：それをね…年五回ってのを様子見て、三回に減らしてみようよ…とかかという話しなんで。

参加者D：僕、ゲイとしては比較的年が上だと思うのですが、HIVに関しては十分すぎるほどの知識はある。けれどもリスクマネジメント…自分自身のリスクマネジメントというもので、コントロールしてしまう、という部分があると思いますね。さっき言ったその、生でフェラチオしてしまうってのもね。そのあたりは、当然、パーセンテージにはならないけれど感染する危険はある。特に不特定、知らない人とそういうことをすると、あるんだけど、自分のその、生き方っていうんでしょうか、そこまで言ったらオーバーですけども、ここまでだったらいいだろう、という感じになってしまう。だからそれが拡大解釈されると、さっきみたいなことになるんですよ。生でやるのは自分で決めたことだから…という。どこまでのリスクを背負えるかっていうことをこの歳になると、そういう考え方になってしまう。だから、いかにしてHIVが感染するかってのは十二分に知ってる。でもセックスはコミュニケーションであり人生のうちで大切な物であるのだから、その中でコレまでは…もしなっちゃったらしょうがない…っていう言い方は変だけれども。もちろんゴムしてしかしてないですけども…その分に関しては自分でコントロールしよう、と僕は思っています。若い人にそれをコントロールができるか、っていうと難しいのかな？と。

参加者F：…結局、QOLを下げてまで予防予防って言ったらみんな引いてしまう訳だし、行動の中で知識を正しくみんな持っているのだとすれば、その行動でその先起こりえることも覚悟というかして、それをさらに受け止めるくらいの気持ちをお互いの人達が持てばいいのかな？というようなところがあるのかな？

Interviewer：質問、参加者のHIV抗体検査受検機とこれまでに受けた回数について。

参加者A：自分とこの団体で、検査イベントをやっていたので、イベントで検査を提供すると言いつつ自分は受けたことが無かった。で、この際…、でも面倒くさくて行かなかった…最初一回目までは…というのがありました。自分とこでやるのに逆に便利だったので、つてのがきつかけですかね。その以前、ものすごい田舎に住んでいた頃は、HIVにそもそも興味がありませんでした。情報も無かった。あと、昼の仕事…朝早くから仕事していると、保健所の検査しかその頃無かった時代だったので、そもそも行けないよね、みたいなものがあったのですが。行きにくい物だった。そういう行きにくいことを解消するためのイベント検査だったのですが。それは、自分が行き易い物を自分で用意しているような物なので…って言うのが理由です。（情報、興味、営業時間がバリアだった）いちばんは行き易さだったと思う。その行き易さも単に時間だけじゃなくて、遊ぶ物とか、何かのついでがついている、というのが大きかった。検査だけやっていたら、ちょっと怪しかったと思う。

参加者B：私は20代の頃に自暴自棄になっていて、もう自分に先は無いら、と思っていたので、生でパンパンやりまくっていた時期があった。で、いざパートナーが出来てから、そのパートナーがHIVに関して意識の高い方だったので、じゃあ、気をつけないといけない、検査受けたらいいと思いつつも、実際検査を受けるの恐かった。だけど友達に検査を受けた。じゃあ、俺も受けよう…なぜかそのとき思いついて、受けて。そのあとはイベント検査で…そこからずっと続いています。先ほど参加者Aさんおっしゃったように、「検査受けたけど怖い。仕事あるから行かない、予約しなければいけないのはうっとうしいなあとか、検査結果を聞きにまた行かなければならぬ。そしたら一体誰が行くの？こんな検査」って最初思った。自暴自棄に拍車がかかりました（笑）。

参加者C：受けた数は一回です。自分の中で感染する可能性は限りなく低いと思っていて、で、一回検査した時つてのもイベントの時で、せっかくだから物は試しで受けてみようという感じで受けた。…（中略）…イベント検査の場合、せっかくだから物は試しだからお土産代わりに受けてみよう、というイメージはあるが、保健所とかに受けに行くのつて、知人から聞いた話だと、対応ひどかったなどとも聞くことがあるので、そこまでしてイヤな思いまでして受けてみる必要は無いかと思う。

参加者D：私はCさんと対称的にHIVに感染し易い状況のところまで遊んでいました。たぶんハッテン場に来る8割から9割の人はHIVに感染していたんでは無かろうか？と個人的には思っています。まあ、当時からリスクマネジメントはしていたので、言葉は露骨ですけど、タチなので、ウケることは一切しないもので、その辺りはリスクも考慮していたんですけど…検査の話ですけども、僕が初めて受けたのは1990年の12月

です。東京都が HIV の流行を受けまして臨時検査イベントを行ったんですよ。それが僕の最初の検査でした。当時は今みたいな状況ではなくて、住所氏名年齢職業、全部書かされました。(周辺どよめき)それが僕の最初の検査です。記念にとってあります。その僕の住所氏名年齢職業が書いてある申込書を。結果通知書も取りに行ったんですよ。それもすべて実名です。そのあとは常設の検査所には何度か脚を運びました。回数としては、間隔としてはそれほど短くはないです。やはり怖いというのは正直ありました。リスクは自分でわかっていたから。それでもエイヤって感じで行って。で、いい思いはしたくないんですけど(周囲くすくす笑)、スタッフで、名前は言いませんが、そのかたはアナルセックスを否定する方で…なんでここの検査所が開設されて、そういう人が集まって来るのに、そういうところでアナルセックスを否定されなきゃならないのか、しかも告知の場で。そういう意味ではその検査所に関しては…今は変わっているでしょうけれども、あまりいい印象は無かった。あとは、イベント検査で年1回ペースで受けている。…(中略)…迅速検査の場合擬陽性が出てもっと大変になる可能性がある。いいこともあるんだけど、万一擬陽性陽性が出た場合のケアをその場で出来ない限り、あんまりしない方がいいんじゃないかな?とは個人的に思います。

参加者 E: 今まで4回受けているが、僕が初めて検査を受けたのは、ストレスでだとは思いますが、直腸炎になった時。病院に行って医師がおそろおそろ「…男性とそういうことありましたか?」って聞くんですよ。だからそのときには確かにあったので、ありました、と、「じゃあ、ほんとうに、差別を持ってる訳ではないんですよ。しかし、そういうときにはこれこれこういう検査をやってますので」と言われて初めて HIV と、あとにか3種類くらい受けた。それが最初の検査。そしてそのあとに、HIV の予防啓発活動に関わるようになって、今の団体がツイズを出す、というときに即日検査がありますよ、こんな検査がありますよ、という問題を伝えることがあったのには自分では経験が無かった。実際に僕が受けたいと…だから僕も受けてみよう、と思ったのがきっかけで、…(中略)…自分が受けていないのにこれを伝えるってのは、良くないなあ。リアルに伝えたい、ってのがありました。

参加者 F: 僕も最初の検査は病院でだった。肛門にコンジローマが出来まして、肛門にコンジローマが出来る人ってことは、だいたいもうアナルセックスの経験者だろうってことで、同じように検査を勧められて。その病院にはそのあとも検査と診察があったので、行くことはあったのですが、おじいちゃん先生っていうのもあり、肛門科ではあったんですけど、その病院から HVI/STD 診療の病院につなぐシステムってのがきちんと確立していたのかどうか?という風に見えた。…保健所もあんまり、フォローが足りないというか、ぶっきらぼうというか。病院紹介の際「ここがいちばんデカイからここがいいんじゃないですか?」みたいな感じで投げやりな感じで。…(中略)…検査イベントがいろいろところでやられていますけれど、それらのイベント検査で HIV 陽性の結果が出た人に対しては一体どういうフォローをしているのかについては僕自身情報を受けていなくて…(中略)…。友達同士で受けて、そのうちの誰か一人が陽性の告知を受けるような状況になったとき、その周りの人に対するフォロー…本人に対するフォローももちろんそうですけど…どこまでやっているのかな?ってところが気になる場所です。

参加者 A: イベント検査でアンケート調査をするときに、一年間に検査を受けましたか?という質問があったのですが。これまでは受けたか受けていないかの二つに一つしかなかったのですが、ここ最近では「確認しているからここ1年は受けてない」という選択肢が出来た。前までそこが想像されていなかったんですよ。前の選択肢だと回答しないか、無理矢理どちらかにマルをつけなければならない。自分が陽性であることを知っている人が正直に答えようとしたらどっちにつけたらいいのかわからなくなってしまっただろうね。

データで取ってしまうと、確認済みだから検査に行っていないという人が「最近1年間検査に行っていない」にマルをつけてしまうと、正しい意味が出てこなくなったりしますよね。

Interviewer (次の質問、セックス以外でゲイの友達と/友達が交流する場所について)

参加者 E: ○○(SNS)です。

参加者 D: ○○(SNS)。

参加者 B: ゲイ向けのコミュニティセンターと ○○(SNS)と。映画祭。…自分とは好みの全然違う人とあえるので違う世界が見る事が出来て勉強になる。パレードもそう。いろんな方、女の子や家族の方が一緒に歩いたりとか。

参加者 D: 交流という意味では、うちのサークルもハッテン目的は一切ありませんので、ウチもある意味では交流の場。

参加者 E: 二丁目の飲み屋、飲み屋で知り合った友達と、外に遊びにいこうかってことになってその友達がまた別の友達を連れて来るとか、あとは自分がイベントをやっているんで、そういった系の。10代とか20代の、HIV の予防啓発も含めてなんだけれども「友達作りをしよう」という…ひとりでも悩んでいる人も多いので「友達作りをしよう」というイベントでもある。

参加者C：知り合う場という意味でしょうか？（知り合う場もそうですが、既に知り合い同士の交流も含めます）  
大学単位でのサークルとか、ネットのオフ会とか、趣味のサークル。

Interviewer：（次の質問、最近もっとも利用している情報源）

参加者D：〇〇(SNS)じゃないですか？（一同賛同） インターネットと言い換えてもいい。いちばん情報を得るには安易な媒体ですよね。掲示板なども含めて。

参加者D：情報の点で言うと、昔は雑誌が担っていた「出会い系」という機能をネットが担っていますよね。

参加者C：しかしネットの情報って、鵜呑みにすると恐い情報も多いし、見たくない情報も入って来る場合もある。ネットも使わない訳じゃないけれども、ちゃんと根拠のある物で、整合性のあわない物は入れないようにしています。

参加者D：やっぱり取捨選択はしていますね。

参加者F：出会いの情報ではなく、イベントに関してなんですけれども、逆に言う情報があふれて過ぎていて、イベントにしても昔はフライヤーだけだったりしましたが、今は知るきっかけが無いと、自分から能動的にネットでは探さないと、欲しい情報が出てこないと思う。

参加者B：昔はですね、雑誌を買う目的が、エロ目的よりは情報だった。ところが、その情報が遅い、雑だっけが多くなって来て、そういう理由で雑誌を買わなくなりましたね。…（中略）…やっぱりネットかな…ということになりますね。僕がさっき言ったように能動的に知ろうと思うなら、ネットがいちばん便利ですね。

参加者D：アメリカには無料のゲイ・ニュースペーパーってのがある。ネットの時代にあっても未だ廃れていない。そこにはポリティカルからエロまであって、そこで、イベント情報を探すと、その週のイベントが日によって出ている。カタイのから柔らかいまで。日本にはこういうのは無いですよ。月刊誌でやるよとするからタイムラグが出てしまうけれども、週刊の新聞ならばそれに対応できると思うのですが。日本ではちょっと。一時やろうとした動きはあったらしいですが、結局は駄目だったようです。そういうのが日本にあるといいなあと、外国に行くといつも思います。

Interviewer：次の質問：HIV 関係の情報、知識の入手もとは？

参加者F：活動の一環でそういう冊子を作ったりもしてるんで、身内びいきでは無いですけど（笑）必要量はそこで揃っているんで、参照先としてそれらを使うくらいで、あとは能動的に探すような事は無い。雑誌ページも「ああ、知ってるからいいよ」と読み飛ばしたりしています。気軽に見れるインターネットも何が正しいかわからないので、信頼できる情報源としては作った冊子ですね。（主催者で医師）も冊子作成に関わっていますし、作って来ている経緯も僕は知っているんで、この情報なら大丈夫だろうという信頼は置いています。

参加者C：予防啓発系の団体とか、HIV 関係に関わっているお医者さんや看護師さんになるべく聞くようにはしている。他のところだと、（参加者B：他のところというたとえば？）ゲイバーでのうわさ話などでは、むしろはきちんと説明してもらっているんですけども、どこが違うんじゃないかな？と思う部分がぼつぼつあったりするもので。

Interviewer：お二人とも情報の出し元がわかっているところを信頼されている？

参加者F：でも僕の場合に限るのかもしれないけれど、病気のフィジカルな部分ではなく、メンタルな部分で、（…陽性者の活動家…）とかに情報伺ってみたいと思うことがある。そういうときは（…予防啓発団体のディレクター…）とか、（…陽性者活動家…）とかに話を聞いてもらったりとか、友達に、話題に関係なく友達に相談したりする事もあります。HIVの「情報」とはまた違う回答ですかね？

Interviewer：HIV、プラス、メンタルな 이슈に関する情報っていうのはここではあるのかな？

参加者F：「情報」というよりも「相談」に近いのかな？長くつき合っている人であれば対抗策というか、その人がその問題にどう思ってどう立ち向かって解決していったのか、通じるものあればアドバイスももらえるかな？っていうのも、情報と言えなくもないのかな？

参加者B：シロウトだなあ俺、だって検査会でもらうパンフレットや検査会の告知で対応する方からのお話とかだけ。他のバーの話とかはどっちかといううわさ話だし。信頼も全然出来ないし。こうやった方がいいよね、でもそれは引くよねとか、そういう話し方になっちゃう。セックスに対する指針を決めようと思ったらパンフレットとか告知のときに伺った事とか。自分でネットで調べるのは苦手。文章の方がわかり易い。紙媒体の方が慣れてるっていうのかな？

参加者F：媒体といえば、一緒に勉強会を開催していたスタッフは予防啓発団体で活動しているという事もあって、周りに相談される事が多く、そういう時は彼は情報を伝える役割を担っている。ネットで調べるよりも詳しくそんな人に尋ねるといことをしている人はけっこう多いのかな？ この人詳しくそうだし、聞いてみよう、